

歌仙家集

三

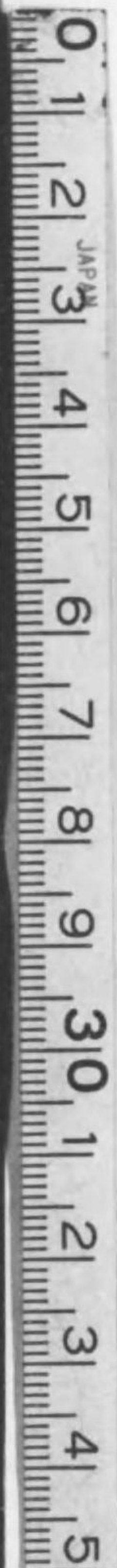
特40-159



1200800193446

特40

159



始





集





集



解題

貫之集 自撰の集ありし事後拾遺集大鏡などに見えたれご今のは
少くももこのまゝにはあらざるべし

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page, mostly illegible.]

貫之集 第一

延喜五年二月二十一日内侍のかみのた給ふいつみのさる
大將四十賀屏風の歌たほせことにてこれをたてまつらる

拾 夏山のかけをしけみやたまほこのみちゆきくひイごもたちまさまるらん

古 じらゆきの降りしくごきはみよし野の山した風にはなそちりける

延喜六年月なみの屏風八帖か料のうた四十五首せし

にてこれをたてまつる二十首ねのひあそふいへ

新古 ゆきて見ぬ人もしのへと春の野にかたみにつめるわか菜なりけり

二月はつうまいなりはうてたたる所

人しれすこゆごたもひしあしひきの山したみつにかけは見えつと
かせさむみわかよりころもうつ時そはきのした葉は色まさりける

十一月かくら

たかく霜にいろもかはらぬさかき葉にかをやは人のこめて来つらん
ねはたかきり

しもかれの草葉をうしと思へはやふゆ野の野邊はひごのかるらん
みやひごのすれるころもにゆふたすきかけて心をたれによすらん

十二月佛名

年のうちにつもれる罪はかきくらしふるしら雪ごごもにきえなん
延喜十三年十月十四日内侍のかみの四十賀屏風の歌

招くごて来つるかひなく花すゝきはほにいてと風のはかるなりけり
秋霧はたちわたれごもごふかりのころはそらにもかくれさりけり
月夜に衣うつごころ
河のほごりに紅葉ある所
水そこにかけしうつれはもみち葉の色もふかくやなりまさるらん
山のもみちじくれたる所
あしひきの山かきくらしじくるれご紅葉はなほそてりまさりける
道ゆく人の馬よりたりてきじのほごりなる松のも

にやすみて波のよるを見たる所
我のみやかけごはたのむじらなみもたえすたちよる岸のひめまつ

延喜十四年十二月二十五日女四宮御屏風のれうのう

新改
たていしるんのたほせによりてたてまつる十五首
新らしき年ごはいへごしかすかにわか身ふりぬるけふにそありける
やま見れは雪そまたふる春かすみいつごさためてたちわたるらん
やまかせに香をたつねてやうめの花にほへるさごに家居そめけん
山のかひたなひきわたるしら雲はごほきさくらの見ゆるなりけり
いかにして敷をしらまじれたちたきつたきのみをよりぬくるしら玉
こゝにしてけふをくらさん春の日のなかきこゝろを思ふかきりほ
月をたにあかすご思ひてねぬものをほこゝきすすさへなき渡るかな
さはへなるまこもかりそけあやめ草袖さへひちてけふやくらさん

住のえのあさみつしほにみそきしてこひわすれ草つみてかへらん

風のたご秋にもあるかひさかたのあまつそらこそかはるへらなれ

かりにこて我はきつれごをみなへし見るにこゝろそ思ひつきぬる

つねよりもとりまさるかなあき山のもみちをわけていつる月かけ

聲をのみよそにきつゝわか宿のはきには鹿のうごくもあるかな

さくかきりちらてはてぬる菊の花うへも千世のよはひのふらん

ふく風にちりぬご思ふもみち葉のなかるごたきごにもにたつらん

延喜十五年閏二月二十五日さいるんの御屏風のわか

うちのたほせによりてたてまつるをんなごもたき

のほごりにいたりてあるはなかれたつる花を見ある

は手をひたしてみつにあそへる

春くれはたきのしら来いかなれはむすへごもなほあわにこくらん

をんなもやまてらにまうてしたる
かくすらん
かたもふことありてこそゆけ春かすみ道さまたけにたちわたるかな
人の木のもごにやすみて河こしにさくら花みた

をちかたの花もみるへくしらなみのごもにや我はたちわたらまし

道行人のかへるかりのわたるを見たる所
ねたきことかへるさならは雁かねをかつきつそ我はゆかまし

花見にもゆくへきものをあを柳のいこてにかけてけふはくらむつ

わか宿のものなりなからさくら花ちるをはえこそさめさりけれ
池のほごりに藤のはな松にかゝれる

新古 及びりなる松にかゝれるふちなれど花のかころこそ花はさきける
二月三日
延喜十五年十二月保忠左大辨の左大臣北方被奉五十

賀時屏風和歌
わかやこの松のこすゑにすむ鶴は千世のゆきかたもふふらなり

水ごのみねもひものななかくる瀧は木ほくの春にそありける
なへてしも色かはらねさごきはなる山にはあきも電られさゆけり

うつろはぬさきはの山にふるさきはむくれの雨そかひなかりける
もみち葉のまなくちりぬる木のもたは秋のかげこそ残らさりけれ

延喜十五年九月二十二日右大將御六十賀清和の七宮
御息所のつかりたまひけるさき屏風料歌四首

春のうめはわか宿のうめこそ春のかすは知るらめ

もろちごりこつたひちらすさくら花いつれの春かきつさみさらん
菊のはなしつくたちそひゆく水のふかきころをたれかじるらん
みよし野の山よりゆきの降りくれといつともわかずわか宿のたけ

延喜十六年^ハ齋院御屏風のれ方のうた内裏まゆれほせ

花を見又山に残れる雪を見たる
梅のはなさくとも知らすまよしの山にともまつゆきの見ゆらん
山さくらよそに見るこすかのねのなかき春日をたあくらむつる
池のほごりに咲ける藤のもごに女ごものあそひて

藤のはないろふかけれやかけ見れば池のみつさへさむらさきなる

なかれよる瀧の糸こそよわからしぬけさみたれてねつるしらたま
うみのほごりにたひたる松のほごりにみちゆく人のさみ
のやすみたる所
幾世へしいそへのまつそむかしよりたちよる波やかすはしるらん
雪の庭にみてりける
よるならば月こそ見まじわか宿のにはじるたへはふりしけるゆき
延喜十七年八月宣旨によりて
人はうへたそくしりけりうめの花さけるのちにそはるもきにける
うめか枝にふりかとりてそしら雪の花のたよりに折らるべらなる
わかなつむ我を人見はあさみどり野邊のかすみもたちかくさなん
うくひすのたえすなきつる青柳のけさうきふじのなくもあらなん

松をのみたのみてさける藤のはな千させののちはいかきそ見る
人もなきやごにほへるふちの花がせにのみこそみたるへらなれ
みてのみやたちくらしてん櫻はなちるををしむにかひしなけれは
をしみにご来つるかひなくさくら花みれはかつこそ散まさりけれ
千世までのゆきかりしあが見れば松風にたくひてたつのごきそきこゆる
いろのみそまさるへらなるいその松かけみる水もみさりなりけり
かへるかりわかごまつてよ草まくらたひは家いもこそひしかりけれ
なかれゆくかはつなくなりあしひきの山ふきの花はほふへらなり
夏ころもしはしなたちそほごきすなくともいまた聞えさりけり
ほごきすまつごころには音もせていつれの里のつきになくらん
来ぬ人おをしたにまちつごひさかたの月をあはれさいはぬ夜そなき
あさ霧のむほつかなきに秋の田のほにいてと雁そなきわたるなる

をみなへしうつろひかたになる時はかりにのみこそ人は見えけれ
花すごきほにはたけごもはつ霜のいろは見えずそきえぬへらなる
やへむくらたひにし宿にからころもたかためにさかうつ聲のする
たぐものはひさしきものを秋萩のした葉のつゆのほごもなきかな
もみち葉のありしく時はゆきかよふあごたに見えぬ山路なりけり
しらなみはふるさごなれやもみち葉の錦をきつごたちかへるらん
物ごごにふりのみかくすゆきなれごみつには色ものこらさりけり
ふるゆきを空にぬさごそ手むける春のさかひにごものこゆれは
延喜十七年の冬なかつかさの宮の御屏風の歌 元日
からころもあたらしくたつ年なれは人はかくこそふりまさりけれ
はるかすみたなひく松のごしあらはいつれの春か野邊にこさらん

たまほこの道はなほまた遠けれささくらを見ればなにか居しぬへし
あたなりと思ふものからさくら花みゆるところおほかはやすくやはゆく
松のたさごにしらふるやま風はたきのいさをやすけてひくらん
いけ水にさきたるふちを風ふけは波のうへにたつなみかこそ見る
もみち葉はわかれをしみて秋風はけふやみむろのやまをこゆるん

貫之集第二

延喜十八年二月女四のみこの御やかみあけのれうの御

屏風のうたうちのめしにたてまつる正月
山のはを見さらましかは春かすみたてるもしらてへぬへかりけり
よる人もなきあをやきの糸なればふきくるかせにかつみたれつ
うつろはぬ松の名たてにあやなくもやされる藤のさきてちるかな
萩の葉のそよくたごこそあき風のひごに知らるゝはしめなりけれ

八月

あま雲のよそのものは知りなからめつらしきかな雁のはつこゑ

九月

いつれをか花ごはわかんなかつきのありあけの月にまかふしら菊

十月

拾 なかれくるもみち葉見れはからにしき瀧の糸してたれるなりけり

十二月

木の間より風にまかせて降るゆきをはる来るまでは花かごそみる

延喜十八年四月二十六日東宮の御屏風料の歌 さく

らの花のもこに人々のをる所

かつ見つゝあかすと思ふにさくら花ちりなんのちそかねて戀しき

池のほごりに藤の花さきたる所

水にさへはるやくるゝごたちかへり池のふちなみをりつゝそ見る

はらへしたるごころ

この河にはらへてなかつごの葉はなみの花にそたくふへらなる

七日ひこほし見る所

あまの河夜ふかくきみはわたるごも人しれすごはたもはさらなん

をごこの萩の花見たる所

たなし枝に花はさけごもあき萩のした葉にわきてこゝろをそやる

こたかゝりしたる所

花のいろをひさしきものごたもはねはわれは山路をかりにこそみれ

たほたかゝりしたるごころ

はなにのみ見えし山の^邊をふゆくればさかりたになく霜かれにけり

雪のふれるごころ

春ちかくなりぬるふゆのたほそらは花をかねてそゆきはふりける

延喜八年承香殿女御屏風の歌たほせによりてたてまつる十四首

うめの花さけるごころ

梅のはなまたちらねともゆく水のそこにうつれるかけそ見えける

たひをかへる雁ともあり

ごもくご思ひ來つれごかりかねはたなし里へもかへらさりけり

松にかゝれるふち

うつろはぬいろにるごもなきものを松か枝にのみかゝるふち浪

人の春の野にあそぶごころ

春ふかくなりぬるごきの野邊みれば草のみごりもいろまさりけり

ちるさくら

たなし色にちりしまかへはさくら花ふりにし雪のかたみごそみる

河のほとりの松

松をのみごきはご思へはよごともになかるれて水もみごりなりけり

やな

やな見れはか風いたくふくごきはなみの花さへたちまさりけり

人の家の池のほとりの松のしたに居て風のたごき

ける

雨ふるごふくまつ風はきこゆれごいけのみきはまさらさりけり

女ごもむれ居て秋の花のちるを見たり

花のいろはあまたみゆれご人しれすはきの下葉そなかめられける

をんなの家にをごこいたりてまかきの尾はなのも

ごにたてり

ふく風になひくをはなをうちつけにまねく袖かごたのみけるかな

なかつきのつこもりにをんな車もみちのちるなか
をすきたり

もみち葉のぬさこもちるか秋はてたつた姫こそかへるへらなれ
月のもこのしらさく

色そむるものならなくに月かけのうつれるえたのしらさくのはな
道行人の松の雪見たる

しろたへに雪のふれはこまつ原いろのみこりもかくろへにけり
人家に佛名のあしたに導師のかへるついでにほふ

しをここも庭にたたりたちてかくあるあひたに
雪のふりかゝれる梅花折れる

うめの花をりしまかへはあしひきの山路のゆきのたもほゆるかな
延喜十九年春東宮御息所の御屏風の料歌内よりめし

十六首の子日の松のもごに人をいたりあそふ
はるの色はまたあさけれさかねてよりみこり深くもそめてける哉

三月花ある
風ふけはかたもさためすちる花をいつかたへゆくはるさかは見ん

ふちの花もこより見すはむらさきに咲ける松こそたごろかれまし

人もみなかつらかさしてちはやふる神のみあれにあふひなりけり

あやめ草ねなかいのちつけはこそ今日さしなれは人のひくらめ

たほぬさの河の瀬ここになかれても千ごせの夏はなつはらへせん

千年ふとわかきくなへにあしたつの鳴きわたるなる聲のはるけさ
 いつごとも人やはかくす花すゝきなごかあきしもほにはいつらん
 秋ここに露はわけごもきくのはな人のよはひはくれすそありける
 みちすゝに時雨にあひぬいごしくほもあへぬ袖のぬれにける哉
 やまももてすれるころものなかけれはなかくそ我は神につかへん
 春くれご草木にはなのさくほごはふり来るゆきのこゝろなりけり

延喜二年五月中宮の御屏風の和歌二十六首をあつまりけり
 昨日よりをちをはしらす百させの春のはしめはけふにそありける
 もごよりの松をはたきてけふはなほたきふし春のいろをこそみれ
 やま里にすむかひあるは梅の花見つゝうくひすきくにそありける
 わすらるゝときしなけれは春の田をかへすゝそひごはこひしき
 あしひきの山をゆきかひ人しれすたもふこゝろのこごもならなん
 三月つこもりの日花たつる所

ちる花のもきにきつとそい^{てニイ}くれはつる^イ春のをしさもまさる^{はイ}へらなる^{れイ}

四月たほみわのまつりのつかひ^{そありイ}

いつれをかじるしと思はんみわの山見えごみゆるは杉にさりける

ゆくかうへにはやくゆけ駒かみかきの三室の山のやまかつらせん

けふもまた後もわすれし^{にほふイ}ろたへの卵の花さけるやごごみつれは

五月たひ人やまのほざりにやごりてほごごきすを

やま里にたひねよにせむほごごきす^{ぬイ}聲きとそめてなかるしつへし

雨のうちに田うごるごころ

時すきはさなへもいたくねいぬへみ雨にも由子はさはらさりけり

六月すごみする所

なつころもうすきかひなし秋までは木の下かせもやますふかなん

たほそらにあらぬものから川かみに星ごそ見ゆるかより火のかけ

七月七日をんなごも空を見る

人知れすそらをなかめて天のかは波うちつけにものをこそたもへ

田まもる家ほある所

かりほにて日さへへにけり秋風にわさ田かりかねはやもなかなん

八月人々^{数人掘野花イ}あまた人の家の花ををるほりうごる所

みる人もなきやごなれは色ごごにほかへうつろふ花にそありける

鹿鳴花

さをしかやいかといひけん秋はきのにほふ時しもつまをこふらん

九月きり山をこめたりも
 ちりぬへき山のもみちを秋きりのやすくもみせすたちかくすらん
 山路にはひこやまこはんかは霧のたちぬさきにいさわたりなん
 十月きくのはな
 うすくこく色を見えける箱のはなつゆやこころをわきてたくらん
 十月あじかりつみたる所
 新古 にはめの衣ほすこてかりてたくあじ火のけふりたぬ目そなき
 十二月人ゆきてうめを見る
 ふる雪に色はまかへはうちつけに梅を見るさへさむくそありける
 延喜二年ひたりのたさとの北の方御五十賀屏風料
 た十首

かひかねの山里みねはあじたつのいのちをもたるひさそすみける
 ふく風にあかすたもひて浦なみのかすにはきみかこしをよせけり
 君さなほ千させのはるにあふさかのしみつは我もくまんこそ思ふ
 かめやまのかけをうつしてゆく水にこきくる身はいく代へぬらん
 君か代のだしのがすをはしろたへの濱のまさことたれかいひけん
 よごともにゆきかふ身を見るここにほにからい出て君を千年こそ思ふ
 式

たなひかぬ時こそなけれあまもなき松かさきよりみゆるしらくも
手ここにそ人はをりけるきみかためゆくすゑとほき秋の野のはき
たちつもるもみちはみれは百こせの秋のごまりはあしろなりけり
かけこのみたのむかひありて露霜に色かはりせぬかへのやしろか
梅のはなはほかるさきにうくひすの冬こもりしてはるをまつらん
みよしの吉野のやまはもよこせの雪のみつもるごころなりけり
延長四年八月二十四日きよつらの民部卿六十賀つねふり

春日野のわかかなも君をいのらなんたかためにつむはるならなくに
さくら花あらぬ松にもなちはなんいろごとくに見つゝ世をへん
我やこに春こそはほく來にけらえさけるさくらのかきりなけれは
きみかためわかをる花は春さほく千させみたひををりつゝそさく
をりつみてはやこさかふれ藤の花はるもふかくそいろは見えける
いとさみ見えてなかるる瀧なればたゆみもあらずぬける白玉

松のねにわらわの木のなれはれなしきものをたえしこそ思ふ
いはひつえ植ゑたるやこの花なれは思ふかこころいろこかりけり
かきりなく我れもふ人のゆく野邊はいろやちくさに花そさきける
さをしかのをのふに咲ける秋萩をむからみへぬるこしそしらぬ
さくの花うゑたるやこのあやしきは若てふこをしらぬなりけり
さくら被はするにすむつるは君かへんよのしるへなるらん

あしひきの山のさか木のこきはなるかけにさかゆる神のきねかも
延長四年九月二十四日法皇の御六十賀京こくのみや
若菜たふる野邊といふのへを君かため萬代しめてつまんこそ思ふ

花ににすのさけきものは春かすみたなひく野邊の松にそありける
 まつ風のふかんかきりはうちはへてたゆへくもあらず咲ける藤浪
 たもふこと瀧にあらなんなかれでもつきせぬものさやすく頼まん
 まつ風やまはふけさふかねさしら波のよするいはほそひさむかりける
 こけなかく生ふるいはほの久しさをきみにくらへん心やあるらん
 かのみゆるたつのむら馬君にこそごたのかよはよはおもふひをまかすへらなれ
 いかてなほ君か千こせはをきくの花をりつと露にぬれんとそたもふ

菊のはなしたゆく水にかけ見れはさらになみなくたいせにけるかない

新古

三條右大臣殿御屏風の歌
 いたつらにたいにけるかな高砂のまつやわか世身のはてをかたらん
 ぬは玉のわかろかみも年ふれはたきのいさそなりぬへらなる
 春かすみたちよらねはやみましの山にいまさへゆきのふるらん
 いつしかもこえてんと思ふあしひきの山になくなるよふこ馬かな
 あしひきの山したときついは波のころくたけてひこそこひしき
 うくひすのはなふみしたく木ちのもはいたく雪ふる春へなりけり
 浦こに咲きいつる浪の花見れはうみにははるもくれぬなりけり
 うめの香のかきりなけれはをる人の手にもそてにもしみにける哉

新教

よきやこるしら雲たにもかよはすはこのやま里はすみうからまし
玉もかるあまのゆきかひさすさをのなかくや人をうちみわたらん
このやこの人にもあはて朝かほのはなをのみ見てわれやかへらん
うつろふをいごふ思ひて常磐なる山には秋もこえずそありける
年月のかはるもしらてわかやこのときはのまつをいろをこそみれ
ひさかたの月かけ見れば難波かたえほもたかくそなりぬへらなる
つなてこきいまはご舟をこきいては我はなみちをこえやわたらん
山たかみこすゑをわけてなかれ出る瀧にたくひてたつるもみち葉
さとの葉のさえつるなへにあしひきの山には雪そふりまさりける
君まさはさむさもしらしみよし野のよしの山にゆきは降るごも

貫之集 第三

延喜御時内裏御屏風のうた二十六首 元日うくひす

あたらしくある今年をももごせの春のはじめさうくひすそなく
わか宿にありごみなから梅の花あはれごたもふにあくごきもなし
山邊ちかくすむをんなごもの野邊に遠くあそひは
なれて家のかたを見やりたる
野邊なるを人もなしごてわかやごにみねのしら雲たりやあらん
たちねごやいひにやらまじ白雲のごふこごもなくやごにゐるらん

むれあつゝかはへのたつも君かため我たもふこを思ふへらなり

ごめきつとなかすもあるかな我宿の萩はむかにもしられさりけり

たぐ霜のそめまかはせる菊のほないつれをもこのいろごかはみん

もみちのいたくちりたる山をこえたる所

ひねもすにこえもやられすあじひきの山の紅葉を見つゝまごへは

川にもみちのなかるゝを見たる所

もみち葉のなかるゝごきは龍田がはみなごよりこそ秋はゆくらめ

人の家のたけたほくたひたる

竹をしもたほくうゑたる宿なれば千ごせをほかのものごやはみる

おほたかとりしたるごころ

おほつかないまごしなればおほあらしきの杜の下草ひごもかりけり
霜かれになりにし野邊ごしらねはやかひなく人のかりに来つらん
山さごに神まつる
神まつるごきにしなればさか木葉のごきはの蔭はかはらさりけり
山さごにすむ人の雪のふれるを見る
雪のみやふりぬごは思ふやまさごにわれもおほくそ年はへにける
喜十一年東イ
山延長六年中宮の御屏風のうた四首右近權中將うけ給
あれひきに引つれてこそあはやふるかもの河なみうあわたりけれ
ほごときすなくなる聲を早苗ごるてまうあわきてあはれごそさ
たきつせのものにそありける白玉はくるたひごに見ぬ時そなき
よにかくれ來つるかひなくもみち葉も月に赤くそてりまさりける

新古

京極の權中納言の屏風のれうの歌二十首
 はるかすみたちぬる時のけふ見ればやこの梅さへめつらむきかな
 我やこに咲けるうめなれど年ごとにこころあきぬさねもほえぬ哉
 野邊なるを人やみるこてわか葉つむ我をかすみのたちかくすらん
 あめこのみかせふく松はきこゆれと聲には人もぬれすそありける
 山ふかきやこにしあれば年ごとに花のさきはあさくそありける
 いたるまにちりもそはつるいかにしてはなの心にゆくぞ知られん
 ゆかりともきこえぬものを山吹のかはつがこゑにほひけるかな
 ゆく月日たもほえぬとも藤のはなみれはくれぬるはるそ知らるる
 さつき来る道も知らねとほこきすなく聲のみそしるへなりける
 一こせをまちつるこころもあるものをけふのくるそ又しがりける
 だなはたは今やわかるるあまの川かはきりたちてちりなり

新古

ふりしける雪かこみゆる月なれさぬれてさえたるころも手そなき
 てる月をひるかこ見ればあかつきにはねかく鳴もあらしこそ思ふ
 うゑし袖またもひなくに秋の田をかりかねさへそなきわたるなる
 雁なきてふくかせきむしからころも君まちかてにうたぬ夜そなき
 やまこほき宿ならなくにあきはきのしからむ鹿のなきもこぬかな
 もみち葉はてりてみゆれさあしひきの山はくもりて時雨こそふれ
 もみちはのなかるるこきは白波のたちにも名こそかはるへらなれ
 しら雪にふりかくされて梅のはなひこしれすこそにほふへらなれ
 ひこせにふたふひにほふ梅のはな春のころにあかぬなるへし
 延喜十年十月十四日女八宮やうせい院の一のみこの
 四十賀つかうまつる時の屏風てうせさせたまふは

久しくもにほはんさてやうめの花はるをかねてやさきそめにけん
いとをのみたえすよりつる青柳のさしのをなかさしるじこそ思ふ
さくらよりまさる花なき春なればあたらじさをはものさやはみる
藤の花さきぬるを見てほさきすまたなかぬからまたるべらなり
あしひきの山したしけきなつ草のふかくもきみをたもふころかな
さこなつの花をし見ればうちはへてすくす月日のかすも知られず
こふるものなくてみるべく我やこのはきのもさにも鹿はなかなん
かりにのみ人のみゆればをみなへし花のたもこそつゆけかりける
かごとろさてちらんだにこそ惜しからめなさか紅葉に風のふくらん
紅葉するくさ木にもにぬ竹のみそかはらぬものためじなりける
まつか枝にふりしく雪をあしたつのちよのゆかりにふるかさそみる
延喜のすゑよりこなた延長七年よりあなたうち

の仰にてたてまつれる御屏風の歌二十七首 春
春たちてかせやふきこく今日みれば瀧のみをよりたまそちりける
わかなつむ春のたよりに年ふればたいつむ身こそわひしかりけれ
ひさしさをねかふ身なればはる霞たなひくまつをいかでこそ見る
春ここにたえせぬものは青柳のかせにみたるさいにそありける
みし人もこぬやこなればさくら花いろもかはらすはなそちりける
人もみな我もまちこしさくら花ひさしたちて見れさあかなくに
いままでにのこれる岸のふちなみは春のみなごのさまりなりけり
あひたなくよする河なみ立かへり祈りてもなほあかすそありける
秋
新古
たほ空をわれもなかめてひこ星のつまよつ夜さへひこりかもねん
をみなへしにほひをそてにうつしてはあやなく我を人やさかめん

ゆく水のころろはきよきものなれごまごまと思はぬ月を見えける
 ひごえたの菊折るほごにあらたまの千歳をたゞにへぬへかりけり
 あしひきの山のかひよりなにごてかしひゆく人をたぢかくすらん
 散るごもいろさへごにもみち葉は百年ふれごかひなかりけり
 には空しあたに見えねは月かけのかはるごきなくてらすへらなり
 春ちかみはなごたもふをわか宿の本すゑにゆきを降りかゞりける
 うくひすはなきそめぬるを梅のはな色まかへごやゆきのふるらん
 てる月をみさらまじかはぬは玉のよるは物へもゆかすそあらまじ
 七日ゆふへをごごあまた居てあまのがはら見たる
 大空はかひもなけれごもたなはたを思ひやりてもなかめつるかな
 こまひき
 みやこまでなつけてひくは小笠原へみのみまきの駒にそありける

うま車にのりて人ねほく野にいてたりさまくの花
 さきまじりたり
 たちぬさは春はきけごもやまさごはまちごほにこそ花はさきけれ
 ふたつこぬはるご思へごかけみれはみなそこにさへ花そちりける
 うくひすの來居つごなけは春雨に木のめさへごそぬれて見えけれ
 河邊なるはなをし折れはみなそこの影もごもしくなりぬへらなり
 さくら花千ごせみるごもうくひすも我もあくごきあらしごそ思ふ
 ちりかたの花みるごきは冬ならぬわかころも手にゆきそふりける
 春のためあたしごころのたれなれは松か枝にしもかゞるふちなみ
 こひ
 月かけにみちまごはしてわか宿のひさしく見えぬひごもみえなん
 こぬ人をつきになさはやぬはたまの夜ごごに我はかけをたにみん

雨ふらむ夜そたもほゆるひさかたのつきにたに來ぬ人のこゝろを
やまさごにつくれる宿はちかけれご雲居ごのみそなりぬへらなる

冬

たぐ霜のこゝろやわける菊のはなうつろふいろのたのかしごなる
たきつ瀬もうきごあれや我袖のなみたにつごたつるしらたま
よごごもに鳥のあみはるやごなれはみはかごらんさくる人もなし
空にのみ見れごもあかぬ月かけのみなそこにはさへまたもあるかな
うきてゆく紅葉のいろのこきからは河さへふかくみえわたるかな
雪ふれはうごきものなく草も木もひごつゆかりになりぬへらなり
いかて人なづけそめけんふる雪ははなごのみこそちりまかひけれ
見えねごもわすれごものを梅の花けさはゆきのみふりかごりつご
くれなるの時雨なれはやいそのかみふるたひごごに野邊のそむらん

しら雲のたなひきわたるあしひきの山のたなはしわれもわたらん ふみこい

承平五年九月東三條のみごの清和の七のみごのみや い

す所の八十賀せらるる時屏風のうたもわか菜つめる い

ちはやふる神たちませよきみかため摘む春日野のわか菜なりけり い

道ゆく人さくらの花を見て馬をこごむ い

ゆく末もむつかに見へき花なれごえしも見すきぬさくらなりけり い

ほごごきすきつごたかなく聲は千世のさ月のしるへなりけり い

九月九日わいたる女の菊してたもてのこひたる い

けふまでに我をたもへはきくのうへの露はちごせのたまにさりける い

拾 しら雪はふりかくせとも千世とせまでいまで竹のみさりはかはらさりけり

承平五年十二月内裏御屏風のうた仰によりてたてま

つる女すのもこいにゐたるにをさこ物いふさくらの

花さけり

よそにては花のたより見えなからころの中にころある物を

子日して車のわかるゝ所にうまにのれる人まつを

くるまにたくる

この松のなをまねはれはたまほこの道わかるさもわれはたのまん

うまにのりたるをさこもふるさこもたほしき所

にうちよりてさくらを折る

ふるさきにさける物からさくら花色はずさもあれすそありける

をさこあまた池のほさりのふちを見る

松か枝にさきてかゝれる藤なみをいまはまつやまこすかこそ見る
女さも神のやしろにまうつ
打むれてころさしつゝゆく道のたもふたもひをかみや知るらん
馬にのれる女たひより来る所
家路にはいつかゆかんさたもひしを日ころしふれは近づきにけり
月夜に女の家をさこいたりて居たり
山のはにいりなんと思ふつきみつゝ我はさなからあらんさやする
女返し
ひさかたの月のたよりにくる人はいたらぬさころあらしこそ思ふ
あしろにもみちのちりいりてなかるゝ所に人たほ
かり
ふたゝひやもみち葉はちる今日みれは綱代本にこそいにこそは落はてにけれ

承平六年春左大臣殿の御たやこたなし所にすみ給ひ
けるへたてのさうしに松と竹とをかゝせ給ひて上給

たなしいろの松と竹とはたらちねのたやこ久しきためしなりけり
鶴むれたる所

つるのたほくよをへて見ゆる演邊こそ千とせつもれる所なりけれ
たなし二年左大臣殿の五らうの侍従の屏風の意

はるかすみ立まじりつゝいなり山こゆるたもひのひこしれぬかな
さかきはの色かはりせぬ百とせのけふこごにこそまつりまつらめ

十一月りんじのまつり
ゆふたすきかけても人を思はねごうつきもけふもまたあかぬかな

十二月晦のゆき
わか宿にふるしら雪をはるにまたごしこえぬまのはなかとそみる

たなし六年春左衛門督殿屏風の歌冬
思ひかねいもかりゆけは冬の夜のかはかせさむみちごりなくなり

たなし八年^{年の夏}八條の右大將本院の北方七十賀せらるゝ
時の屏風 人の家の松

かはらすも見ゆる松かなうへしこそ久しきごのためしなりけれ
ふちのはな

なこりをは松にかけつゝもごせの春のみなごに咲けるふちなみ
山さご
草も木もしけきやまへはくる人のたちよるかけのたよりなりけり

人の家にはなたちはなある所

年ここにきつと聲するほごきすはなたちはなやつまごなるらん

たき

白雲のなかるこのみ見えつるはたち来る瀧のつねにそありける

野の花

秋の野のちくさの花はをみなへしましりてたれるにしきなりけり

山の月

くさきみなもみちすれごもてる月の山のはよよにかはらさりけり

水邊菊

きくのはなひちてなかる水にさへ浪のじわなきやごにさりける

河邊につるむれたる

河の瀬になひくあしたつたのかよを波ごごもにやきみによすらん

人の家の竹のたけのまて

千世もたる竹のむひたるやごなればちくさの花はものならなくに

承平七

年たてははなうふへくもあらなくに春いまさらゆきの降るらん

秋はきにみたるきたまはなく鹿のこゑより落つるなみたなりけり

野邊みれば若菜つみけりうへごそ垣根のくさもはるめきにけれ

春たちて子の目になれはうぢむれていつれの人か野邊に來さらん

のまごのこゝろはいのもごに女ごもたりて見る

ゆきこのみあやまたれしを梅の花くれなゐにさへかよひけるかな
 遠く山に人家にさくら花はかりのひたひたの影に來るさ
 こころもあはるなれこわか宿のさくらにまさるはなやなからん
 我身あまたあらしと思ふこみな底にたほつかなきは影にやはあらぬ
 秋來れははたねをむしのあるなべに唐はむきにも見ゆる野邊かな
 山里の人の家につりこのあり水のうへに木の葉たさふ
 やまぢかきこころならすは行水ももみちせりそをたさるか花まじ
 人の家のすたれのもごにをんないて居たるにかきす

のもごにをここたちて物いひいるかきのつらにす
 すきたひたり
 いてゝごふ人のなきかな花すゝきわれをはかるごまねくなりけり
 人家にをごこをんなにはの菊見る
 うゑてみる菊さいふ菊は千世までに人のすくへきしるしなりけり
 りんしのまつり
 足ひきの山あゐにすれるころもをは神につかふるしるしこそみる
 人の家に女すたれのもごにたちいてゝ雪の木にふ
 りかゝれるを見る
 草木にもはな咲きにけりふる雪やはるたつききにはなごなるらん
 まつか枝につるかごみゆるしら雪はつもれる年のしるしなりけり

あを柳のまゆにこもれるいごなれと春のくるにやいろまさるらん
またしらぬところまでかく来てみれば櫻はかりのはなとかりけり

貫之集 第四

天慶三年四月右大将殿御屏風の歌二十首 一人の家に

こうはいあり

後くれなるに色をはかへて梅のはなかそこ／＼にほはさりける
あを柳のまゆにこもれるいごなれと春のくるにやいろまさるらん
またしらぬところまでかく来てみれば櫻はかりのはなとかりけり

海のほごりに風吹き波たつ
ふく風にさきてはちれさうくひすのこえぬは波の花にそありける

みちゆき人
あはご見る道たにあるを春かすみかすめるかたのはるかなるかな

藤のはな
ほごときすなくへきごきは藤の花さけるを見ればちかつきにけり

くれぬごは思ふものからふちの花さけるやごにははるそひさしき

人の家にごこなつあり

かはる時なき宿なれば花ごいへごこなつをのみ植ゑてこそ見れ

をごこ山さごにゆくついでに木のもごにほごとき

すをきく

行先はありもあらずもほごときすなくこごにてを聞きてくらさん

をごこをんな舟にのりてあそふ

まちつけてもろごもにこそかへるさ波よりさきに人のたつらん

秋の風萩のはをふく

いつもきく風をはきけご萩の葉のそよくたごにそあきはきにける

家にをんな月を見る

思ふごごありごはなしにひさかたの月夜ごなれはいこそねられね

道行人のはつかりをきく

ごごつてもごふへきものを初雁のきこゆるこゑははるかなりけり

ごたかより

もごくさのはなは見ゆれご女郎花さけるかなかにをりくらしてん

をごこたひのやごりに鹿のなくをきく

なく鹿はつまそごふらしくさまくらゆくたひごに聲なきかせそ

をんなある家の菊
をよりにてぬくよしもかな朝ごにきくのうへなる露のしらたま

九月

時雨ふるかみなつきこそちからし山のたしなへいろつきにけり

雨なれこしくれこいへはくれなるに木の葉のしみてちらぬ日はなし

ふるごきはなほあめなれご神無月しくれそやまのいろはそめける

水のほごりにつるあつまる

むれてをるあしへのたつを忘れつゝ水にもきえぬゆきかこそみる

十二月つこもり雪人の家にあり

花ごみるゆきのいましもふりつらん春ちかくなるごしのつねかも

同年閏七月右衛門督殿屏風のれう十五首 正月元日

人々あそひしたる所の庭にうめの花さけり

老らくもわれはなほかち千世まで
のふは二月はつうまいなぬまうて
いかににもいならぬごりのいなり
うちむれてこえゆく人のたもひを
三月池の中じまに松つる藤の花
松もみなつるも千ごせの世をふれ
ゆふたすきかけたるけふのたより
五月あやめくさぬはるの山
さ月てふさつきにあへるあやめ
六月はらへまはははるの山
みそきつと思ふごころはこの川
そのこのふかきにかよふへらなり

ひこゝせに一夜と思へこたなはたはふたりともなき妻にさりける
 つまこふるむかしのなみたや秋はきのした葉もみつる露なるらん
 千年をしりぬむべははし玉をぬけるこそみるきくのしらつゆ
 咲きのころ菊にはみつもながれね秋ふかくこそはほふべらなれ
 八月鹿のなくをきく
 こころじもかよはじものを山ちかみ鹿のねまはばまさるむひかな
 水にもみちうかへる
 もみち葉のかけをうつしてゆく水は波のはなまきべうつるひはけり
 人の家には松竹あり
 歌きはのみやごにおるかなすむ人のよはびも松さだけさなりけり

ことしはやあすにあけなんあもひきのやまに霞はたてりさやみん
 山のはにゆふ日さむつくるれゆくは春にいりぬるさしにさりける
 中將屏風の歌二十三首 元日
 あたらしき年のたよりにたまほこの道まごへする君かごそたもふ
 あしひきの山邊の松をかつ見れはこころを野邊にたもひやるかな
 あさなけに見つゝすめさもけふなれは山邊のみこそ思ひやらるれ
 野山に花の木ほれり
 山にはさけるかひなしいろみつゝ花ご知るへきやごにうゑなん
 たひいてたあする所にある女ごもわかれをしめる

をしみつゝわかるる人を見るときは我なみたさへさまらさりけり
思ふひごさめめてはほくわかるれはこころゆくごも我思はなくに
かねてより別を惜しご知れりせは出てたまむさはねもはさまらまむ
草も木もありごは見れごふく風にきみかごしつきいかよごそ思ふ
さくらはなかつちりなから年月はわか身にのみそつもるへらなる
あたなれごさくらのみこそ故郷のむかひなからの物にはありけれ
見しごごくあらすもあるかな故郷は花の色のみあれすはありける
三月つこもり

ゆく春のたそかれ時になりぬれはすぐひすのねもくれぬべらなり
春のけふくるるまじはゆくひすのながすはなりぬる心なりけり
卵の花のいろ見えまかふゆふしてけふごそ神をいのるべらなれ
はるすきで卵月になれはさかき葉のときはのみこそ色まさりけれ
この里にいはなる人かほるるもやまほごときすたえすきくらん
ゆふつくよひさしからぬを天の川はやくたなはたこきわたらなん
つもりぬる年はねほかれご天のがは君かわたれるかすそすくなき
ごまりてふ此ごころにはくる人のやかてすくへきたひならなくに

をまの月にはごひきたるをきよてをんなふもたのまはげり
 ひくこのねのうちつけに月影をあきのゆきかごたごろかれつ
 月かけも重がさ見つとひく琴のきえてつめごもじらすやあるらん
 ひく琴のねごにたもふ心あるをこころのごくきともなさなん
 人もみな我ならぬさもあきの田のかりにそものをたもふへらなる
 八重むくははけののみごそなりまされ人目を宿のくさ木ならまじ
 つれれご年ふるやさはぬは玉の夜もひもながくなりぬべらなり
 いかきにもまたはらぬほごは人じれす我思ふごを神やじらなん
 なたなれやもめなる人の家
 雪のふるいへ

たひ人のきぬうつごをききたる
 草まくらゆふ風さむくなりぬるをころもうつなるやさやからまし
 をごこの女の家に来て夜ふかくなるまでたちわつら
 ひて人にえあはてあるに
 いごごふ人もなきかなこよひもや馬さへなきわればかへらん
 あしろには白波もまたよらぬ日そなき
 もみち葉のなかれてたつるあしろには白波もまたよらぬ日そなき
 野やごりせるたひ人
 ももかれの草まくらには君こふるなみたのつゆそたきまさりける
 いつごてもたもはさらめご君かけて家こひしきはたひにさりける
 雪のふるいへ
 いちしるきしるしなりけりあら玉の年のくるとはゆきにさりける

同四年正月右大将殿の御屏風の歌十二首
 元日人の家
 家にまれうごあまたきたりあるはやのうちにいりあ
 るは庭にわり立ちて梅の花を折る
 春たよはさかはごたもひしうめの花めつらむひにや人のをるらん
 人の家にまれうごあまた来て柳さくらのもごにむ
 れ居てあそひするに花ちりまかふ
 青柳のいろはかはらてさくらはな散るもごにこそゆきはふりけれ
 ふちの花まつにかよれる
 むかしいかにたのめたれはか藤浪の松にしもなほかよりそめけん
 をごこ神のやしろにまうてたる
 いのりくる神を思へはたまほこのみちのさほさもむられさりけり
 をごこをんなの木のもごにむれ居たる所に舟にの

りてわたる人あるかたよひをさして物いへるやう
 なりそのさま郭公をきけるに似たり
 拾かのかたにはやこきよせよほこきす道になきつご人にかたらん
 うみのほごりなる人の家にをんなすたれをあけて
 うみを見いたせりそのなかにいたく老たる女あり
 はまへにて年ふるひごはしら波のこもにむろくそ見えわたりける
 人々秋の野にあそぶ
 秋の野の萩のにしきはをみなへしたちましりつとたれるなりけり
 女○なの池のほごりなるたいにむ○て水の底を見
 る
 月かけのみゆるにつけてみなそこをあまつ空ごやたもひまさはん
 菊たほくたひたる河のほごりなる人の家に女ごも

たほくかはつらにいてとあそふ
みなかみにひちてさけれと菊の花うつろふかけはなかれさりけり
人々舟にのりてあしろにいけり

棹さして來つるころはしら波のよれとさまらぬあしろなりけり

道行人河のほごりに鶴むれ居たるを見る

よそなれはみきはにたてるあしたつを浪か雪かごわきそかねつる

ななし年三月うちの御屏風の料の歌二十八首 元日

雪ふれり

けふしまれ雪の降れはくさも木も春てふなへにはなそさきける

子
歸るさはくくなるとも春の野の見ゆるかきりはゆかんとそ思ふ

うめのはなのちれる

うめの花にほひてあるときはかくすに似たるゆきそふりける
やなきたほかる所
青柳をたよりと思ひて春のうちのみごりつもれるころなりけり
さくら花をる時にしもなくなれはうくひすの音もくれやしぬらん
田つくれるころ
あらを田をかへす今より人しれすたもひほにいてん事をこそ思へ
やまふき
うつるかけありと思へはみな底のものこそ見ましやまふきのはな
はるのくると日
あすもくる時はあれとも花見つなれぬるけふはをしくそありける
池のほごりに咲ける藤舟にのりてあそひ見る

漕きかへりみれともあがすわがれにし春のなごりのふちなみの花
 あけくるよ月日あれともほごときすなく聲にこそなつはきにけれ
 なかけくにいろをそめつと春も秋もしらてのみさくごこなつの花
 鳥の音はあまたあれともほごときすなくなる聲はさつきなりけり
 わか宿のいけにのみすむ鶴なれば千ごせのなつのかすはしるらん
 かけふかき木の下かせはふきくれば夏のうちなから秋そ來にける
 ゆく水のうへにいはいはへる河やしろかはなみたかくあそふなるかな

七夕 木下
 たなはたのうきふしならて世をふるは年に一たひあへはなりけり
 はつかりの聲につけてやひさかたの空のあきをもひごに知るらん
 なく鹿のこゑをさめつと秋はきのさけるをのへにわれは來にけり
 月ごごにあふ夜なれともよをへつとこよひにまさる影なかりけり
 みな人のたいをさむといふきくはもとごせをやる花にさりける
 野の花見たる

たぐ露やはなのいろここにそめわきて秋のくれさは人にみすらん
九月くる日
草も木もみちありぬさみるまてに秋のくれぬるけふはきにけり
残の菊
秋さけるきくにはあれやかみなつき時雨そはなのいろはそめける
いねかりほせる
かりてほす山田のいねの袖ひちてうゑしさなへさ見えもするかな
あしろ
やま風のいたくふきたろすあしろには白波さへそよりまさりける
はつゆき
雪ふれはくさ木になへてをる人のころも手さむきはなそ咲きける
松と竹とあり

はつもみな竹もあやけくさくかせは露のぬる雨のたゑそきにゆる
ゆく月日はのみにもあまなくになかる
同五年亭子院御屏風のれろにうた
水なかにありこそえけれ春たあてにほりどくれはたつるしらたま
みはしの吉野の山にはるかすみたつをみる
むか尾はゆ木もひそめてし野邊なれば若菜つみにそ我は來にける
木なほ色に散りまかふともうめの花香をふりかくす雪なかりけり
水のあやのみたる池にあをやきの糸のかけさへそに見えつ
はるかすみとひわけいぬる聲ききて雁きぬなりとほかはいふらん
あはやふる神のたまゆにゆふたすきかけてや人もわれをさふらん
さくら花ふりにふるさも見る人のころもぬるへきゆきならなくに

藤なみのかけしうつれはわかやどのいけのそこにも花をさきける
 はな鳥もみなゆきかひてぬはたまの夜のまにけふの夏は来にけり
 はるかにも聲のするかなほさきすきのくれ高くなけはなりけり
 五月雨にあひくることはあやめ草ねなかきいのちあれはなりけり
 あしひきの山田を植ゑていなつまのたもに秋にはあはんどそ思ふ
 ふく風のしるくもあるかな萩の葉のそまくなかにそ秋は来にける
 つなはへてもわたりつる我宿のわさ田かりかねいまそなくなる
 人知れすきつるごころに時しもあれ月のあかくもとりわたるかな
 かりにのみ入の見ゆればをみなへしはなのたもそ露けかりける
 つとめてそみるかかりける花すさきまねくかたにそ秋はいぬらん
 神無月しくれにそめてもみち葉をにしきにたれるかみなひのもり
 みよしの吉野のかはのあしるには龍のみなわそまあつもありける

山ねなし年九月内裏御屏風のうた五首 元日雪ふれる
 しろたへに雪のふれとは草も木もごむごむにもあたらじきかな
 梅の花のもごにをごごをんなむれあつとさけのみ
 なごして花を折りてうちなる人のやれる
 まれに来てをれはやあかぬ梅の花つねにみるひさいかとそ思ふ
 返し
 宿ちかく植ゑたるうめの花なれと香にわかあけるはるのなきかな
 九月九日
 もとごせを人にささむるはなとれとあたにやは見る菊の上のつゆ
 いねかりほせる
 あさ露のたくてのいねはいな妻をさふとぬれてやかわかさるらん

たなし八年四月のななしの屏風のうた十二首
ちこそといふ松をひきつゝ春の野のこほさも知らず我は來にけり
あしひきの山のさくらの色見てそをちかたひこはたねもまきける
惜めごもごまらぬけふは世の中にほかに春まつころやあるらん
なつ衣たちてし日よりほごときすこくきかんこそ待ちわたりつる
年ここにけふにしあへはあやめ草うへも根なかくたひそめにけり
たまごのみみなれみたれてちちたきつ心きよみやなつはらへする
くるゝ日はたほかりながらたなはたは年に一夜やよるをしるらん
ひさかたのあまつ空よりかけ見ればよくごころなき秋の夜のつき
うつろへごかはらさりけり菊の花たなしむかしのいろやさくらん
聲たかくあそふなるかなあしひきのやまにいませかへるへらなる
たく山のみえみ見えぬは年くれてゆきのふりつゝかくすなりけり

たなし八年二月うちの御屏風のれう二十首 家にて
子の日したるごころ

わかゆかてたゝにしあれは春の野の若菜もなにもかへり來にけり
もごごせのうつきをいのる心をはかみなからみなしりませるらん
ほごごきすなけごも知らすあやめ草こそくすりひのしるしなりけり
うき人のつらきころをこの川のなみにたくへてはらへてそやる
一ごせをまちはしつれごたなはたのゆふくれまつは久しかりけり

かりに来る我は知らてあきの野になくまつむしの聲をきくかな
 水にさへなかれてふかきわかやこは菊のふちこそなりぬへらなる
 かけて思ふ人もなけれごゆふされはたもかけたえぬ玉かつらかな
 さかき葉のときはにあればなかくに命たもてるかみのきねかな
 冬草のかれもはてなてしかすかにいまごしなればかりにのみくる
 やまごにはへりける人のもごにつかはしける

貫之集第五

やまごにはへりける人のもごにつかはしける
 昔こえぬまは吉野のやまのさくらはな人つてにのみきよやわたらん
 昔山さくらかすみのまよりほのかにも見じはかりにや戀じかるらん
 昔世の中はかくこそありけれふく風のめにみぬ人もこひじかりけり
 昔よし野川いはなみதாகくゆく水のはやくそひさをねもひそめてし
 昔あふこごは雲井はるかになるかみのわざにきよつとこひや渡らん
 人知れすもの思ふごきは難波かたあしのそらねもせられやはする
 なみにのみぬれつるものをふく風のたよりうれしきあまの釣ふね

古津の國のなにはのあしのめもはるにしけきわか戀ひご知るらめや
 ひごしれぬれもひのみこそわひしけれ我なけきを我のみそきく
 もえもあへぬこなたのたもひかな涙の川のなかにゆけはか
 くれなるのふりてつとなくなみたには袂のみこそいろまさりけれ
 風ふけはたえすなみこそ磯なれやわかこころも手のかわくごきなき
 こひしきや色にはあるらんみた川なかるゝ音のみつそうつろふ
 かせふけはみねにわがるとしら雲のたえてつれなき人のこゝろか
 なみた川たつるみなかみはやけれはせきそかねつる袖のしからみ
 ゆくすゑはつひにすきつとあふここの年月なきそわひしかりける
 古しら玉と見えしなみたも年ふれはからくれなるになりぬへらなり
 なけきこる山路はひごも知らなくに我こゝろのみつねにゆくらん
 山かけにつくるやま田のこかくれてほにいてぬ戀そ侘しかりける

もゆれさもえる花たになき富士のねに戀ふ中をはたさへまらなん
 後たむけせぬわかれする身のわひしきは人目をたひご思ふなりけり
 なかき夜をたもひあかして朝露のたきてしくれはそてそひちぬる
 たなはたに思ふものからあふここのいつとも知らぬ我そわひしき
 昔もさはかきはねかく鳴もわかここくあしたわひしき数はまさらむ
 かさすともたちにしなき名にはこごなし草もかひやながらん
 逢ふここの山ひこにしてよそならは人目も我はよかすそあらまし
 たなはたの年にひごたひあふここのは人めそのちの空にはありける
 昔まこもかるよこの澤水あめふれはつねよりこごにまさるわかごひ
 よそに見てかへる夢たにあるものをうつとに人わかぬるかな
 昔我こひはしらぬ山路にあらねごまごふこゝろそわひしかりける

古きみこふるなみたもなくはから衣むねのあたりほいろもえなまし
 逢ふこを月日にそへてまつさきはけふゆく末になりねこそ思ふ
 朝なおつけつれはたまるわかのみ思ひみたれてはてぬへらなり
 秋風のいなはもそよにふくなへにほに出てて人そひしかりける
 手もふれて月日へにけるしらま弓ねきふしよるはいこそねらね
 わかためのあたにさりける年月はたもひもなきてゆきかへりつ
 しきしまのやまこにはあらぬから衣ころもへすして逢ふよしも哉
 なみたにそぬれつしほる世の人のつらきこよるは神のじつつか
 逢ひ見んたもふ心をいのちにていけるわか身のためのもじけなき
 あふここのなくてつき日はへにけれこ心はかりはあけくねもせず
 伊勢の海にあまこならはや君こふるこよるの深さかつきくらへん
 いそのかみふる野の道のくさわけて水くみにはまたもかへらん

古いにひかへになほたちかへるこよるかな戀もきこに物わすれせて
 こしつきは昔にあらぬ今日なれこひもきこはかはらさりけり
 戀にのみ年はすぐせこほごきすなくかひもなくなりぬへらなり
 さつき山こすゑをたかみほごきすなく音空なるこひもするかな
 あはれごもこひごも思ふ色なれやたつるなみたに袖のそむらん
 哀てふごごにしるしはなけれごもいはてはえこそあらぬものなれ
 あはれてふごごにあかねは世の中をなみたにかふるうかふ我身なりけり
 さをしかのなきでしからむ秋萩にたけるしらつゆわれもけぬへ
 秋はきを見つしけふこそくらしつれ下葉はこひのつまにさりける
 身をせはみ袖よりもふるなみたにはもの思もなきひごもぬれけり
 野邊みればたふるすき草わかみまたほにいてぬ戀もするかな
 きみこふるなみたは秋にかよへはや空もたもごもごもにじくる

人の身にあきやたつらん言の葉のうすくこくなりうつろひにけり
 秋は我こそろのつまにあらねとも物なけかしきころにもあるかな
おもはをじからてかなしき物は身なりけりうき世をむかん方しなけれは
ひこのころのゆくへし秋の野のうつろふ見れはつれもなくかれにしひさは草葉こそ思ふ
 もさちさりなく時はあれご君をのみこふることろはいつご定めす
古秋の野にみたれてさける花のいろのちくさに物をたもふころかな
 あけたてはまつさす紐の糸よわみたえてあはすはなさいけるがひ
 雨やまぬやまのあま雲たち居つやすきさきなく君をしそたもふ
 たほ空はくもらさりけりかみな月じくれごちかはわれのみそする
 年をへてこひわたれとも我ためはあまのかはらのなきそわひじき
かあまの川みつたえせなんかささきの橋をし知らすたさわたりなん
たえもくれなるに袖そうつろふこひしきやなみたの川の色にはあるらん
もまたすて

人をたもふこそろの空にあるさきは我ころも手そつゆけかりける
 あき風にはきの下葉のいろつけはひさりぬる身そこひまさりける
後秋の野のくさ葉もわけぬわか袖のものたもふなへに露けかるらん
 きえやすき雪はしはしもごまらなんうき事なけくわれにかはりて
しけき古よごごもになかれてそゆくなみた川冬もこほらぬみなごなりけり
 雨ふれはいろさりやすき花さくらうすきことろも我たもはななくに
はいろならはうつろはかりもそめてまじたもふ心をむるひごそなき
えやはみせける君によりぬれてそわたるからころも袖はなみたのつまにさりける
 はつかりのなきこそわたれ世の中の人のごころのあきしうければ
後すみの江の松にはあらねごよもにこころを君によせわたる哉
むねぬるよのわか古夢路にもつゆそたくらし夜もすからかよへる袖のひちてかわかぬ
つかひ人めてふこごはいかなる道なれはいつちもゆかてはるけかるらん

しつはたにみたれてそ思ふ戀しきをたてぬきにしてたれる我身か
 さけはちる物ごたもひしくれなわはなみたの河のいろにさりける
 あはれてふごををにしてぬく玉はあはて年ふるなみたなりけり
 つまこふる鹿のしからむ秋はきにたけるしらつゆわれもけぬへし
 思ひあまり戀しきごきは宿かれてあくかれぬへきごまちこそすれ
 ふる雪をゆきごみなくにひごしれす物たもふごきの数まさりけり
 いろいろもなきごころを人にそめしよりうつろはんごは思はさりしを
 ちかくてもあはぬうつろに今宵よりごほき夢みんわれそわひしき
 萩の葉のいろつく秋をいたつらにあまたかそへてすごしつるかな
 はるかすみ山ほととぎすもみち葉も雪もたほくのしそへにける

わひ人はごしに知られぬ秋なれやわかそでにのみもしくれふるらん
 ちのふれご戀しきごきはあしひきの山よりつきのいてさこそくれ
 うつろにはあふごごかたし玉のをのよるはたえすも夢に見えなん
 わひわたる我身はつゆをたなくは君かあたりかきねのくさにきえなん
 わすられすごひごきものは春の夜の夢ののこりをさむるなりけり
 ねぬる夜のゆめは浪にもあらずにたちかへりつと君をみみつるか
 ちほととぎす人まつやまになくごきは我うちつけにひひまさりけり
 なけきこる山ご我身はなりぬれはごころのみこそいさなかりけれ
 ゆふされはひごまつ蟲のなくなへにひごりある身を戀まさりける
 山ひこの聲のまにたつねゆかはいつごごもなく我やまごはん

昔 ふる雨にいでともぬれぬ我そてのかけに居なからひちまさるかな
 ひこしれすいはぬたもひのわひしきはたきに袂のぬるまなりけり
 人知れすあたしこころのありけりは波路このみややまてなぐらん
 夢を見てかひなきものわひしきはさむるうつこの戀にさりける
 あひみすはいけらしこのみ思ふ身のさすかにをしく人知れぬかな
 かきくもり雨降ることみちしらぬかささり山にまさはるまかな
 深山にはさきもさためぬもささりめつらしけなくなきわたる哉
 ちるさきはうしこいへも忘れつゝ花にこころのなほさまるかな
 ねられぬをしひてねてみる春の夜の夢のかきりはこよひなりけり
 うつゝにも夢にもあはて悲しきはうつゝもゆめもあかぬなりけり
 からころもたもさをあらふ涙こそいまはさむふるかひなかりけれ
 新古 じるじなきけふりを雲にまかへつゝ世をへて富士の山はもえけり

わひ人のそてをやかれるやまかはまなみたのこくたつる瀧かな
 このころはさみたれちかみほごさす思ひ亂れてなかぬ日そなき
 鳥のねもきこえぬやまのうもれ木は我ひこしれぬなけきなりけり
 花すさきほにはいてしと思ひしをさくもふきぬるあきのかせかな
 昔 ひこりしてよをしつくせは高砂のまつのごきはもかひなかりけり
 世の中ははる来ぬへしごささしかご戀には年もくれすそありける
 しら波のうちかへすごもはま千鳥なほふみつけてあごはささめん
 ふみかよはす女のいかさありけんあまたさひかへり
 こごもせさりければやりつるふみをたにかへせさい
 ひやりたりければふみやきたる灰をそれごて木こせ
 たりければみてやれる
 君かためわれこそはひこなりはてめしら玉つさややけさかひなし

ぬきみたるなみたもしはしごまるやご玉のをはかり違ふよしも哉
拾 てる月もかけみなそこにうつりけり似たるものなき戀もするかな
稀にあふごきくたなはたも天の川わたらぬ年はあらじごそたもふ
今朝のごこの露木きなから悲しきはあかぬ夢路をこふるなりけり
うちよする浦波みればわかこひのつきぬかすごそまつしられける
いつごてか我こひきらんちはやふるあさまの山のけふりたゆごも
人しれすわれもなきつご年ふれはうくひすの音もものごやはさく
ひご星もまつ日はあるをいまさらに我をいへごもひごのたのめぬ
あひみすて戀しきごをたごふれはくるしき旅はこごものならなくに
あひ見すてわか戀しなむいのちをはさすかに人やつらしご思はん
拾 ひとりねはわひしきものごこりよごや旅なる夜しも雪のふるらん
いつしかもけふをくらししてあすかかは渡りて早くたまもかへらん

なかむれはわひしきものを山の端に入日ごくさしはやもくれなん
みる人もなくてわれをか身はごはすごもたそかれ時にはやもならなん
身にそへるかけごもなしに何しかもほかにわひしき人ごなりけん
たちよれば袖にそよめく風の音のちかくはきけごあひもみぬかな
めにも見え聲もたえせぬほごなれご忍ふるにこそはるけかりけれ
秋はきはした葉のよそに見しかごもひごりねんごは思はさりしを
あき萩のしたはを見つごゆふされはいつしかの音になきわたる哉
ひごめゆくなみたをせけはから衣たもごはぬれぬねこそなかるれ
しつむごもうかふごもなほ水そこになををい鳥のごもにこそ思へ
いかてなほ人にもごはんあかつきのあかぬわかれやなにごるたりご
人のもごよりまかり歸りてつかはしける
後 あかつきのなからましかは白露のたきてわひしきわかれせまじや

あひしりたる人のもごにしはしかよはぬほごになかま
たえにけるを又思ひかへしていひやる
さいそのかみふるの中道なかくに見すはこひしとたもはまじやは
またはなほよりつかめごも玉の緒のたえごたえては侘じかりけり

賀之集第六

賀部

延喜十二年定方の左衛門督の賀の時の歌
みなそこに影をうつして藤のはな千世まつごころにほふへらなれ
百ごせごいはふを我はきくなから思ふかためはあかすそありける
八條院にてきんひくをきくてよめる
なかき夜の秋のしらへをきく人はをこごにきみをちごせごそなる
延喜十二年十二月春たつあしたにきたかたの左衛門
のかみのないしのかみに賀たてまつれるごきのうた
ごごし生のにひくはまゆのから衣千世をかけてそいはひそめける

いはの上にもちりもなければ、蟬の羽の袖のみにそははらふへらなれ
 年をのみたもひつめつゝ今までにこゝろにあけるさきのなきかな
 こしの中に春たつことをかすか野の若菜さへにも知りけるかな
 住の江のまつ十九のけふりはよこゝもに浪のなかにそかまふへらなる
 延喜十年春宮のみやすこころのみきのたほいこのの
 御賀たてまつりたまふとて御かさしのれうにやすた
 たの右大辨のよませたまふ
 こゝろありて植ゑたる宿の花なれば千ごせうつらぬ色にさりける
 年こごにはなしにほへはかそへつゝ君か千代まで折らんごそ思ふ
 藤原のかねすけの中將さいさうになれるよろこひに
 いたりたるにはしめてさいたる紅はいを折りてこご
 しなん咲きはしめたるこいひいたしたるに

春こごにさきまさるへき花なればこごしをもまたあかすごそ見る
 延長五年九月右大臣殿せさいあはせのまけわさ内舎
 人たちはなのすけなはつかうまつるすはまにかける
 草も木もたもひしあれはいつる日のあけくれこそは頼むへらなれ
 いてゝ来る山もかはらぬなか月のありあけのつきの影をこそみれ
 ねかふさ心にあれは植ゑて見るまつを千ごせのためじごそ見る
 色かへぬかへのはのみそ秋來れごもみちするこごならはさりける
 うちまよふあしへにたてるあしたつの齡をきみになみもよせなん

浪間よりいてくる龜はよろつ代さわか思ふことのしるへなりけり
たかごしの數ごかは見るゆきかひて千鳥なくなるはまのまさごを
て左大臣殿しらかは殿にたはします御ごにもまうて
もくくさの花のかけまてうつしつと音もかはらぬしらかはのみつ
すみのえの松のかせをしこめたれはあふくあふきのいつがつけせん
まこと宰相中將の四條のみやにすみはしめたまふにまうて

てこののついでありてよめる
ものごごにかけ水底にうつれごも千ごせのまつそまつは見えける
承平五年十二月左衛門のかうのごのをごごをんな
きみたち元服しもきたまふ夜よめる
後 大原やをしほのやまのこまつはらはやこたかくれ千世のかけ見ん
源公忠朝臣のこに元服せさせ給ふ所にてよめる
きみをのみいはひかてらに百ごせをまたぬ人なくまたんごそ思ふ
天慶六年正月藤大納言殿の御せうそくにて魚袋をつ
くろはせんごて細工にたまへるをねそくもてくるあ
ひたに目たかくなりしかはいぬについたちの目はつ
けすありしかは大殿に此よしをきこしめしてわかむ
かしよりようするをあえものにつけふはかりつけよご

たほせられてたまへりしかはよろこひかしこまりて
 たまはりようしてまたの日まつの枝につけて返した
 てまつるそのよろこひのよしないのかみのごのに
 いさゝかかきみむごなん思ふをしのひてそのよしか
 きいたしてごあるにたてまつる
 ふく風にこほりさけたる池の魚は千代までまつのかけにかくれん

(Faint bleed-through text from the reverse side of the page)

貫之集 第七

別

人のうまのはなむけによめる
 古をしむからこひしきものを白雲のたちわかれなはなにこゝちせん
 古しら雲のやへかさなれるをちにもたもはん人にこゝろへたつな
 人にわか^をれけるによめる
 古わかれてふこごはいろにもあらなくに心にしみてわひじかるらん
 古ごは山木たかくなきてほごときす君かわかれをしむべらなり

ひこのかみ藤原のさきすけさいふぬしのくたるにや
れる

ひさひたにみねは戀しきころあるにごほ道さして君かゆくかな

藤原のこれをかかむさしになりてくたるにあふ坂の

せきこゆとて

かつこえて別れもゆくかあふ坂は人たのめなる名にこそありけれ

兼茂朝臣ものへいくに兼輔朝臣餞する雨ふる日

ひさかたの雨もころにかなはなむふるさて人のたちさまるへく

みちのくへくたる人ををしめる

からころもする名にたへるふしの山こえん人こそかねてをしけれ

またもこそものへゆくひさわかをしめ涙のかきりきみになきつる

さほくゆく人にわかれをしみて

かほくゆく人のためにはわか袖のなみたのたまもをしからなくに

かねすけの兵衛佐督かもかはのほごりにて左衛門の官

人みはるのありすけかひゆくうまのはなむけによめ

君をしむなみたちそふこの河のみきはまさりてなかるへらなり

あひしりたる人の物へゆくにぬさちきりやるさて

ゆくけふもかへらん時またまほこのひきもの神をいのれこそ思ふ

もみち葉も花をもをれるころをは手向のやまのかみそ知るらん

つるのかたにぬさいるものをしてよめる

千こせをは鶴にまかせて別るごもあひ見るごをはあすもさそ思ふ

左中辨よしみつのおそん人のうまのはなむけする

所にぬさにかゝんとてよませたる

いとまたきみゆる紅葉は君かためたもひそめたるぬさにさりける
たまほこのたむけのかみも我こそくわか思ふこそを思へこそ思ふ

師氏少将

もろきの中將しなのへゆく人にうまのはなむけせん

さてよませたまへる

我にしも草のまくらはこはなくに物へごきけはをしくそありける
きみかゆくごころごきけは月見つをはずて山そこひしかるべき

たなし少将のものへゆく人にひうちのくしてこれに

たき物をくはへてやるによめる
をりく／＼にうちてたくひの煙あらはこころさすかをしのへこそ思ふ

もろまさの侍従のよませたまふに

遠くゆくきみをしむご人もみなほごきすき企なきぬへらなり

ものへゆく人まつほごすくれは

たもふ人またきもあちすあふ坂のせきの名こそはなのみなりけれ

たちはなのきんまりのうちのつくしへ下るごきその

ころあはのかみごしたのあそんまはくのないし

のすけにたくる物ごもにくはへたるうた

しはし我ごまるはかりに千代までも君かたくりはくすりごせめ

かつら

うち見えんたもかけごに玉かつらなかきかたみに思へこそ思ふ

あまたにはぬひかさねごから衣たもふごころはちへにさりける

あまたにはぬひかさねごから衣たもふごころはちへにさりける

あひたに雨ふりてえいかすなりにけれはよめる

あひたに雨ふりてえいかすなりにけれはよめる

君をしむごころのそらにかよへはやけふごまるへく雨の降るらん

見てたにもあかねわかれをにたまほこの道のわくまで人のゆくらむいかな
 あつらへてわするなご思ふ心あれは我身をわくるかたみなりけり
 さのすはまのつるのはねにかける
 千だせまで命たへたるつるなればきみかゆきをししたふなりけり
 たなし人のうまのはなむけにやるとて兵衛のかみの
 まませたるに
 さほくゆく君をねくるご思ひやるごころもごもにたひねをやせん
 たなし人のうまのはなむけにたちはなのすけなはか

さうそくたくるごてくはへたる
 たまほこの道のやま風さむからはかたみかてらにきなんごそ思ふ
 たなし人のうまのはなむけにたきはきたごのしらかは
 このにてせさせたまふにかはらけごりて
 人もみなごほみちゆけご草まくらこのたひはかりをしきたひなし
 たひ人にぬさやるごて
 わかれゆく人ををしむごこよひよりごほき夢路にわれやまごはん
 ちくこのかみの子のくたるにあふきやるにくはへた
 あふけごもつきせぬ風はきみかため我ごころさすあふきなりけり
 子の人をはりのかみ藤原のたきかたかめのくたるにぬさ
 うそくやるごてくはへたる

たつぬきの我れもひをはたまほこの道のへことにかみもつけなん
その人のごかにたほゆるからころも忘らるなさてぬけるなりけり
人はいさ我はむかしのわすれねはものへとききてあはれこそ思ふ
あふみのかみきんたゝのぬしのくたるにたくる

わかれをしき道にまた我ならはねは思ふこころそたくれさりける
たなし人のくたるをあふ坂までたくらんごてかねみ

のむほきみのこのれうによませたる
いにて行く道はしれどいしれどあふ坂はむかへいかへらん時の名にこそありけれ

みなもこのきんたゝのあそんの近江のかみにてくた
るによめる

ねになきてわひしと思はぬほごなれごつねの心にかはりけるかな
もろまさの頭中將あつまへくたるをんなにくしのは

こかゝみなごてうしてやり給ふにそふごて

わかれてもけふより後は玉くしけあけくれ見へきかたみなりけり
しなのへゆく人にたくる

昔月かけはあかすみるごもさらしなの山のふもごになかゝるすなきみ
人の國へくたるにたひにてよめる

さいごによる物ならなくにわかれ路のこころほそくもたもほゆる哉

たつねのぬれはかきすはたまはここの道のへこまにかみもつげなん
その人よとがたはほゆるからごろもたもたててのけるなりけり
人はいか成はむかしのむすねほもあへささるあはれさそ思ふ
あふみの外あつたふのぬしのくたるにたも
おかにせしき道にまた成ならはれは思ふこもあはれさそ思ふ
たむし人のくたるをあふほもたむしるさそ思ふ
まじりまじりまじりまじりまじりまじりまじりまじりまじりまじり
いさよの國よとけさよさよさよさよさよさよさよさよさよさよ
* 貝むひおるもすまさをまぢさよさよの山あまゆひおるもすま
まぢのゆゑへんこつこへ
おほしきまぢまぢまぢまぢまぢまぢまぢまぢまぢまぢまぢまぢまぢ
さあまぢまぢまぢまぢまぢまぢまぢまぢまぢまぢまぢまぢまぢ

貫之集第八

哀傷

あひしれる人のうせたるによめる
古夢ごこそいふへかりけれ世の中にうつゝあるものと思ひけるかな
きのごものりうせたる時によめる
古あす知らぬわか身とおもへどい
山寺にゆく道にてよめる
古あさ露のたぐての山田かりそめにうき世のなかをたもひぬるかな
あるはうせたるいへに櫻はなを見てよめる
古色も香もむかしのたさにほへともうるけん人のかけそこひしき

かほらの左大臣うせ給ひて後にいたりてはほかまごり
いふ所のさまのあれにたるを見てよめる

君まさてけふりたえにし鹽かまのうらきひなくも見えわたるかな
そせいうせぬさきふてみつねかもごにたくる

いそのかみふるくすみこし君なくて山のかすみはたち居わふらん
返し

君なくてふるの山邊のはるかすみいたづらにこそたあわたるらめ
ごあるに又

きえにきご身こそ聞えめいそのかみふるき名うせぬ君にそありける
世の中はかなき事を見て

うけれごもいけるはさてもある物をしぬるのみこそ悲しかりけれ
昨日まであひ見しひごのけふなきは山のくもこそたなひきにける

いつみの大將うせたまひて後にさなりなる人の家た
人々いたりあひてさかく物かたあなごするついでに
かのこののさくらのおもしろくさけるをこれかれあ
はれかりて歌よむついでに
君ましくむかえはつゆかふるさこの花見るからにそせのぬるらん
かねすけの中將のめのうせにけるさこのもはすのつ
こもりにいたりて物かたりするついでにむかえをさ
ひごのふるあひたによめる
こふるまに年のくれなはなき人のわかれやいさごほくなりなん
たいしらす
たちかへり悲しくもあるかな別れてはむるもむらぬも煙なりけり
ふちころもたりきるいごは水なれやぬれはまされご乾くまもなし

東宮かくれたまへるころよめる
 かすみたつ山邊をきみによそへつと春のみやひさなほやたのまん
 きみまさぬはるのみやにはさくら花なみたの雨にぬれつとそふる
 延長八年九月京極中納言諒聞のあひたにはこのふく
 になりて
 ひこへたにきるはかなしき藤ころもかさぬる秋をたもひやらなん
 ことよみてささの國にあるあひたにたくられたる返心
 ふちころもかさぬる思ひたもひやるころはけふも劣らさりけり
 たいしらす
 うくひすの
 ほごきすけさなく聲にたころけは君にわかれし時にそありける
 夢のこごなりにし君をゆめにたに今は見るこごかたくもあるかな
 たく露をわかれしきみごたもひつとあさなくにこひまかりけり

たやのたもひにはへりけるさきよめる

藤ころもはつるといはきみこふるなみたの玉のをこそなりける

かいせううせぬさきとてかのをひ在原のまさのふか

もごにさいひてあつたの中將のもごにたくる

あけくれてちさせあるものと思ひしをなほ世の中は夢にさりける
 人のこごちさせゆくまはたかさこの松さわれさやけふをくらさん

京極中納言うせ給ひての後あはたにすみたまふ所あ

りけるそこにいたりて前裁に松竹なごあるをみてよ

める

松もみなたけもわかれを思へはやなみたのしくれ降ることちする
 かけにきてたちかくるればから衣ぬれぬあめふるまつのこゑかな

たなし中納言うせたまへる年のまたのさしのついた

ちの目かの申納言の御いへはたてまつりける

ふちころもあたらしくたつ年な花はふりにし人はなほやこひをき

珠もあなすけりよはぬの思へおやふんすのうけ朝ることさす

ある

おける子こころのたれし前跡に珠かなとあるさふしよ

京師中隠言とせぬりし人の思おしよすふんすは

人のことささきぬまおしぬるこの珠はけしやけしやうとさふ

おけしよしよささあさとの思ひしやけしよの中跡にさふりける

まことこころのたれしの中跡のまことこころ

ぬしやけしやけしよとすふのまふしよのまふ

敷こころおけるよけしよおしよふんすのまふすのまふす

すふのまふすのまふすのまふすのまふす

貫之集第九

花をよめるぬすぬすのまふすのまふすのまふす

花をよめるぬすぬすのまふすのまふすのまふす

花をよめるぬすぬすのまふすのまふすのまふす

花をよめるぬすぬすのまふすのまふすのまふす

花をよめるぬすぬすのまふすのまふすのまふす

花をよめるぬすぬすのまふすのまふすのまふす

花をよめるぬすぬすのまふすのまふすのまふす

花をよめるぬすぬすのまふすのまふすのまふす

花をよめるぬすぬすのまふすのまふすのまふす

花をよめるぬすぬすのまふすのまふすのまふす

古君をたもひたきつの濱になくたつの尋ねくれはそありきたにきく
 古たきつ浪たかしの濱のはまはつの名にこそきみをまわたりつれ
 古難波かたたふるたまもをかりそめのあまごそ我はなりぬへらなる
 池に見ゆる月をよめる
 古ふたつなきものと思ふをみなそこひしに山のはならていつるつきかけ
 春新やいにぬる秋ぬるやはくらん木ほつかなかけのくち木の世を過す身は
 かうふり給はりてかゝのすけになりてみのとすけに
 うつらんごまうすあひたにうちのたほせにて歌よま
 せたまふにかきてたてまつる

降るゆきや花ささきてはたのめけんなごが我身のなりかてにする
 こしのかたなる人にやる
 古たもひやるこしのしら山しらねさもひさ夜も夢にこえぬ夜そなき
 雨ふれさきたにたへなひくあま雲をきみによそへてなかめつるかな
 しかの山こえにてやまの井にをんなの手あらひて水
 をむすひてのむを見てよみてやれる
 古むすふてのしづくににさる山の井のあかても君人にわかぬるかな
 すさく院のみかこの御時やはたのみやにかものまつ
 りのやうにまつりしたまはんささためらるゝにたて
 まつる
 古松もたひてまた苔むすにいはいしみつ行すゑさほくつかへまつらん
 いはしみつ松かけたかく影みえてたゆへくもあらずよろつ代迄に

千世ご思ふ君かたよりにけふまちてつまんご思ひし若菜をそつむ

花のちる木のもごに來てかへりなんさて

我はきて家へさゆくをちるはなはさきしえたにもかへらさりけり

みなもごのきんたごのへんにひごにたいめしけるに

いかなる目にかありけんたいめせさりける時よみて

たてまつる

たまほこのごほ道をこそ人はゆけなごかいまのま見ぬはごひしき

九月九日たごみねかもごより

折る菊のしつくをたほみわかゆてふいふぬれ衣をこそ老の身にきれ

ごよみてわくれる返し

つゆふかしけき菊をし折れる心あらは千世のなき名はいのたごんごそ思ふ

ちくふしまにまうつるにもる山ごいふ所にて

古しら露もしくれもいたくもるやまは下葉のこらすもみちしにけり

むかしはせにまうつごてやごりしたりし人のひきし

うよらていきたりければたまさかになん人の家はあ

るごいひいたしたりしかはそこなりしうめの花を折

りているごて

古人はいさごころもしらすふるさこの花そむかしの香ににほひける

返し

花たにもたなしごころに咲くものを植ゑたる人のごころ知らなん

秋のたつ目殿上のぬしたちかはせうようしにいきて

歌よむついでによめりし

古かは風のすくしくもあるかうあよする浪ごごもにや秋はたつらん

むかし人の家にさけのみあそひけるに櫻のちるさか
 りにて人々花をたいにうたよみしついでに
 ちるうべにちりもまよふかさくら花かくてそこその春もくれにし
 はるうたあはせせさせたまふに歌ひこつたてまつれ
 さまほせられしに
 さくらちる木のした風はさむからて空にしられぬゆきそふりける
 延喜御時やまごうたしれる人をめしてむかしいまの
 人のうたたてまつらせたまひしに承香殿のひんかし
 なるごころにてうたえらせたまふ夜のふくるまで
 かういふほごに仁壽殿のもこの櫻の木にはごきす
 のなくをきこしめして四月六日のよなりければめつ
 らしかりをかしからせ給ひてめし出てよませたま

ふにたてまつる
 こと夏はいかくなきけんほときす今宵はかりはあらしごそきく
 たきかせが歌のかへしや
 さくらにはことろのみこそ苦しけれあきてくらせる春しなけれは
 たきかせかもごにかきつはたにつけてやれる
 君かやごわかやごわけるかきつはたうつろはぬごきみん人もかな
 返し
 むつましみ一日へたてぬかきつはたたか鳥にかはうつろひぬへき
 があるかへじまた
 たうちにて君かこひけんかきつはたを外にてうつろひぬへし
 ありはらのもごかたかもごにたくれる
 しら雲のたなひきわたるくらはしの山のまつごもきみは知らすや

たゞみねかもごにたくれる
 かひかねのまつに年ふるきみゆゑに我はなけきごなりぬへらなり
 みなもごのむねゆきのあそんのもごより
 君ひごりごはぬからにやわか宿のみちもつゆけくなりぬへらなり
 ごある返しに
 草のつゆたきしもあへし朝なけにこころかよはぬごきしなけれは
 みつねか
 まごごなきものご思ひせはいつはりの涙はかねてたごささらまし
 ごある返し
 惜からぬいのちなりせは世の中の人いつはりになりもしなまし
 こと夏きのくにとくたりてかへりのほるみちにてにはかに
 うまの死ぬへくわつらふごころに道ゆく人々たちご

あまりて云ふやうこれはこゝに居ますかる神のしたまひ
 ふならんごしころやしろもなくしるしも見えねごう
 たてあるかみなりさきくかうやうにわつらふ人々
 あるごころなりいのりまうしたまへごいふにみてく
 らもなければなにわさすへくもあらずたゞ手をかき
 あらひてひさまつきてかみあますかりけもなきやま
 にむかひてそもく／＼にの神ごかいふごいへはあり
 ごほしのかみごなんまうすごいひければこれをき
 てよみてたてまつるうたなりそのけにやうまのこ
 ちやみにけり
 かきくもりあやめも知らぬたほ空にありごほしをは思ふへしやは
 なにはのたみのゝ島にて雨にあひて

古雨によりたみのゝ馬を来てみれば名にはかくれぬものにそありけるわか身なりけり

源のごしのふのあそんのよひにたこせたるにいまま

うてこむとてたそくいきければ

はる日すら我まつひごのこんさたにいはずはあすも猶たのまゝし

ごあるかへし

こしと思ふころはなきを櫻はなちるごまかふにさはるなりけり

七夕つごめてみつねかもごにてよめる

君にあはてひごひふつかになりぬればけさ彦星のこゝちこそすれ

ごある返し

拾 あひみすてひごひも君にならねはたなはたよりも我そまされる

あくる年の七月みつねかもごにたくれる

朝戸あけてなかめやすらんだなはたはあかぬ別れの空をこひつゝ

しはすのつこもりかた身をうらみてよめる

拾 しもかれに見えこし梅は咲きにけり春にわか身はあはんごはすや

拾 ぬはたまの我くろかみにごしくれてかゝみのかけにふれるしら雪

たかさこのみねの松ごや世の中をまもるひごごやわれはなりなん

けふ見ればかゝみに雪そふりにけるたいのしるへは冬にさりける

京極のさいさうの中將のみもごに老ぬるよしをなけり

きてよみてたてまつれる

後 ぶりそめてごもまつ雪はぬはたまの我くろかみのかはるなりけり

返し

後 黒髪の色ふりかはるしら雪のまちいつるごもはうごくそありける

またかへし

後 くる髪ご雪ごのなかのうきみればごもかゝみをもつらしごそ思ふ

色みえてゆきつもりぬるみのはてやつひにけぬへきやまひなるらん
たなし中將のみもごにいたりてかれこれ松のもごに

重出 かけにぞて立かくるれはからころもぬれぬ雨ふるまつのこゑかな

あるところに春と秋といつれかまされるごごはせたりせり

まひけるによみてたてまつりける

拾 はる秋にたもひみたれてわきかねつ時につけつうつるころは

草も木もふけはかれぬるあき風にさきのみまさるものたもひの花

ことしけきころよりさく物たもひの花のえたをはつら杖につく

花ををりてこれかれかさすついでに

かさせごも花さくごやは頼まるゝ身のなりいつへき時しなけれは

御の中承平五年十二月左衛門のかみごのをごをんなたご

ちのかうふりしもきたまふよごの

今までにむかしの人のあらませはもろごもにこそゑみて見まじか

いにかいごでたまへる御かへし

いにかいへをこふる心のあるかうへに君をけふみてまたそこひしき

わかやごを春のごもにしわかるれは花はしたひてうつろひにけり
むねゆきの左京大夫のもごよりひさしくあはぬごご
をいひて
よそにても思ふころはかはらねごあひ見ぬ時はこひむかりけり
ごあるかへし

さくらちり卵の花もまたさきぬれはこころさしには春なつもなし

つかさならてなけくあひたに正月のころほひ坊城の

左衛門のかみのもごに大ごのによきさまにまうし給

へごまうしたてまつりたまへさてたてまつる

朝日さすかたのやま風いまたにもてのうらさむきこほりさかなん

かれはてぬうもれ木あるを春はなほ花のゆかりによくなごそ思ふ

うもれ木のさかてすきにむ枝にしもふりつむ雪をはなごそみれ

あらたまの年よりさきにふく風ははるごもいはすこほりさきけり

のふもごかもしより

世の中にたれかなたかきたらちをさ我さかなかをひさはしらなん

返し

われはいさ君かなのみそしらくものかゝる山にもたごらさりける

またかへし

山にこそたごらさるらめきみか名はあまの川までなかれいにしを

世の中なけきてありきもせずしてあるあひたに三月

つこもりの日まさたゝのあそんのもごより

君こそすてごしはくれけりたちかへり春さへけふになりけるかな

ごもにこそ花をも見んごまつ人のこぬものゆゑにをしきはるかな

ごある返し

君にたにゆかてへぬれはふちの花たそかれ時もしらすそありける

やへむくらこゝろの中にふかければ花見にゆかんいてたちもせず

あはぬまに梅もさくらもすきぬるを卵の花をさへやりつへきかな

ちりかはる花こそすきめほごきす今は來なかんこゑをたにきけ
 秋はきのあるたにをしくあかなくに君かうつろふきくそわひしき
 梅のはなにほひのふかく見えつるは春のさなりのちかきなりけり
 かねい
 秋はきのあるたにをしくあかなくに君かうつろふきくそわひしき
 梅のはなにほひのふかく見えつるは春のさなりのちかきなりけり
 かねい
 秋はきのあるたにをしくあかなくに君かうつろふきくそわひしき
 梅のはなにほひのふかく見えつるは春のさなりのちかきなりけり
 かねい

たなしもごなつかもごより
 こち風にこほりごけなはうくひすのたかきにうつる聲をつけなん
 さいへる返し
 いてつたふ花にもあはぬうくひすは谷にのみこそなきわたりけれ
 ちかごなりなるをこて正月三日もごなつかもごに
 たりたるになかりければかくなんまうてきたるさい
 ひねきてかへりにたるつごめてたくれる
 ごはごひごはすはさてもあるへきをものご始にかへるへしやは
 ごある返しに
 こころさし君にごごめて年ふれはかへるわか身はものならなくに
 もごなつかほかにねてあかつきにかへりてかごたご
 くをきとて

よかれしていつからくるそほごきすまた明けぬより聲のしつらん

三條の内侍のかたさかへにわたりてつごめてかへる

あひたにもものなごいふついでにむすふてのしづくに

にこるごいふ歌はかりはいまはさらにえよみたまは

しなごいひて車にのるほごによめる

家なからわかるごときは山の井のにこりしよりもわひしかりけり

六月に木の葉のもみちたるをさりてうたよみてまさ

たよのあそんのもごよりたくれる

秋こそあれ夏の野邊なる木の葉には露のころのあさくもある哉

ごある返し

なつなから秋をしらするもみち葉はいろはかりこそ變らさりけれ

あつよしの式部卿のむすめいせのこのはらにあるを

すむ所ちかくありけるにをりてかめにさしたる花を

たぐるごてよめる

ひさしかれあたにちるなご櫻はなかめにさせれごうつろひにけり

返し

後千世ふへき瓶なる花はさしなからごまらぬごは常にやはあらぬ

たなしごころに小さきくるみの木のありけるをき

てこひてほるごてよめる

うくひすに花しられけは見えねごも秋來るみちのものにさりける

返し

あをやきの糸もくるみのいかなれは花よりごごにたごらさりけり

ちかごなりなる所にかたさかへにあるをんなのわた

れるごきとてあるほごにごごにふれて見きくにうた

よむへき人なりとききてこれかよむさまいかてこゝろ
ろ見んと思へといこむこゝろにしあらねはふかくも

いはぬにかれもこゝろみんこや思ひけんはきの葉も
みちたるにつけてたこせたりあはせて十首をんなは

秋はきのした葉につけてめにちかくよそなる人のこゝろをそみる
返し

世の中のひとのこゝろをそめしかは草葉のつゆも見えしこそ思ふ
下葉にはさらにうつらてひたすらにちりぬる花となりやしぬらん

返し
ちりもせずつろひもせず人を思ふこゝろのうち花しさかねは

をんな

花ならてうつろふものはしかすかにあたる人のこゝろなりけり

返し
あたなりごなたて^{つく}る人の言の葉にほはぬはなもわれはさくかな

をんな
色も香もなくて咲けはやはる秋も^{みえ}なくてこぶろのちりかはるらん

返し
春あきはすくすものからこゝろには花も紅葉もなくこそありけれ

をんな
はるあきにあへごにほひもなきものはみ山かくれの朽木なりけり

返し
たく山のうもれ木に身をなすごは色にもいてぬこひのためなり

ひさしうすみける家をすまじごてほかへうつるにま

へにむひたる松竹をみて

松もみなたけをもことごとめたきでわかれていつる心じらなん

昨日けふみへきかきりごまもりつと松とたけをいまそわかると

つかさたまはらてなけくころ大殿のものかきせ給へり

るわくによみてかける

思ふこところにあるをあめごのみたのめる君にいかて知らせん

拾 いたつらに世にふるものと高砂のまつもわれをやごもごみるらん

十二月つこもりかたに身のうきを^{へい}なけきて

雪たにもはなごさくへき身にもあらて何をたよりご春をまつらん

六月つこもりにまさたのあそんにわかれる

復 はなもちりほごきすさへいぬるまで君にゆかすもなりにける哉

返し

復 はな鳥のいろをも香をもいたつらに物うかる身はすくすなりけり

三月つこもりの日ある人のもごにやれる

復 又もこんごしそご思へごたのまれぬ我身にもあれはをしき春かな

世の中心ほそくつねのこもちもせさりければみなも

このきんたきのあそんのもごに此歌をやりけるこの

あひたやま^{うつ}ひたもくなりにけり

拾 手にむすふ水にや^{うつ}ごれる月影のあるかなきかの世にこそありけれ

後に人のいふをきけは此歌の返しせんごは思へごいそき

てもせぬほごにうせにけれはきくたごろきてかのわくれ

りしうたに返しをよみくはへてたたきにてすらしてかは

らにてなんやかせけるごいふはまごごにやあらん

三月ふたつある年左大臣さねよりのきみにたてまつ

れる

後あまりさへありてゆくへき年ことしたにたにも春にかならず違ふよしもかな

春源さいふたいさくのさくららの花をうすかみにつよ

みて

空しらぬゆきかご人のいふさくさくらのふるは風にそありける

ふく風にさくらのなみのよる時はくれゆくはるを空かごそねもふ

たさひらごまうすねさのにしなるごのにうつりた

まはんごてそのごのさひごつやに御むすめのないし

のかみのたはすへきかたごのさやのさうしに松つる

なごひごつかへにかきたるたいに下よませたまふ

いろかへぬ松ご竹ごやたらあねのおやこひさしきたためしなりけり

鶴のたほくよそへてみゆるはまへこそ千年すこもることろなりけれ

春のくるよ日たほせにてつかうまつれる

さむごしの為にはいぬる春なれさけふのくるよは惜くそありける

さくらなき年ならなくにいまはごて春のいつちかけふはゆくらん

ある人のやまふきの花を見よごてたまへるにたてま

つる

音にきく井手のやまふきみつれごもかはつの聲はましらさりけり

もろすけのさいさうの中將ごのニ四郎イきみのはじめ

てはかまきたまひてのちたほちたごの御もごにま

ありたまふ日たくりもの返りにくはへんごてよま

せたまふによめる

ここにいはて心のうちをしるものはかみのすちさへぬけるなりけり

れいにあらずなやみたまひけるによめるへはれりるるりたり
やみをきてけふかあすかこまつほこのをりふし知るは涙なりけり

こよめるをうちにきこしめしてたほんごふらひにつ

かはさんごてめじとにすはれはれこの情もこひま

鶯のはなになくねをきとしまにいさをしきこご知らすそありける

あはれなるをきこふも心のけこまはれけり

あはれなるをきこふも心のけこまはれけり

あはれなるをきこふも心のけこまはれけり

あはれなるをきこふも心のけこまはれけり

あはれなるをきこふも心のけこまはれけり

あはれなるをきこふも心のけこまはれけり

あはれなるをきこふも心のけこまはれけり

終

